

小磯 仁

『ヘルダリーン 愛の肖像 —ディオーティマ書簡—』

萩野 静 男

わが国周知のように著者は長年にわたり、ヘルダリーン研究にいそしんでこられた。その営々たる研究活動には敬意を表したいと思う。その成果は様々な翻訳や著書の形で発表されているが、本書はその一連の成果に続くものといえる。

本書は主としてディオーティマことズゼツテ・ゴンタルト・ボルケンシュタインがフリードリヒ・ヘルダリーンに宛てた17通の書簡およびヘルダリーンがズゼツテに宛てた4通の書簡（そのうち現存するもの1通、グスタフ・シュレーギアーの転写によるもの3通）の翻訳、小磯による書簡解説、そして注釈からなっている。その他、手紙の授受と詩作に与えた恋愛の影響とに関する文章、二篇の詩（『ディオーティマを悼むメノンの悲歌』ならびに『いまは 遠い彼方からでも…』）の翻訳、さらには『ディオーティマ書簡』刊行小史」が付されている。

テキストとしてアードルフ・ベック編のシュトゥットガルト大版、手稿写真を掲載するD. E. ザットラー編のフランクフルト版、ヨッヘン・シュミット編のドイツ古典叢書版、ミヒャエル・クナウプ編のミュンヘン版、さらにズゼツテ書簡の刊本の古い諸版も挙げられている。またヘルダリーン文庫のマリアンネ・シュッツ女史の協力もあったという。

本書の翻訳・解説・注と上掲諸版の原文・解説・注との双方にあたってみたが、本書の記述に完全には同意できない。例えば翻訳には首を傾げざるを得ない箇所がある。解説は文献学的体裁をとってはいるものの、実はかなり思弁的ではないだろうか。また注の付け方にも若干の疑問が残る。以下紙面の許す範囲で問題点を述べさせていただく。

まずズゼツテ第一書簡の訳である。本書8頁終わりから2行目の「時間」というのは「一日」の誤りではないか（原文では den Tag）。9頁「大きな海の流れ」は原文では「大きな箱」(einen großen Kasten)である。12頁左から3行目の訳文には「親密に一つ屋根の下に暮らしていた」とあるが、「一つ屋根の下に」は原文にはない („solcher Innigkeit“のみ)。13頁「私はお姿を一度として見るができなかったのです」は „ich sah Dich nicht einmal von weitem“ の訳らしいが、これは「私はお姿を遠くからすらも見るができなかったのです」とすべきだろう。そして15頁1行目の「わたしの心という心」は「わたしの心の大切な方」と訳した方がいい。さらに16頁「事実、たくさんのことをすすんでお話したかったのです」は „und hätte Dir doch gerne so viel gesagt, das Rechte kann ich aber nicht ausdrücken“ の訳文と思しきものだが、ここは「でもあなたにとっても多くのことをすすんで言ったとしても、適切なことは表現しえないのです」とすべきだろう。17頁6行目「動きたい」は文脈から判断すると「読みたい」の誤りだ。その10行目「私の眼の前

に」は „vor mir“ の訳だがこれは「私の前途に」としたほうがよくはないか。そして同じ行にある「自分の眼の拡がり」は „einen Gesichtspunct“ の訳語だが、意味不明である。

小磯による第一書簡の解説は断定的かつ極めて刺激的だが、それは恣意的な場合もある。その例をいくつか見てみたい。10頁左から6行目に「深い喜び」とあるが、著者の訳文を見ても分かるとおり「深い」という形容詞は本来存在しないのであるから、これは単に「喜び」としななければならない。また12頁「…この底なしの欠落の深度を、恐怖の深遠の止めどなさを」やズゼッテが「なすすべもなく立ちつくす」という表現もやや度が過ぎるかもしれない。さらに原文には存在しない「一つ屋根の下に」ともに「暮した」という文を著者は解説の部分でも使用している(18頁)―「同じ屋根の下で三年もの間一緒に生活した者」という言葉は第一書簡の最終部にようやく出てくるものなので、それをこの時点で使用することは不相当だろう。またその頁に「ヘンリーは、絶えず何かに、何者かに、その者に怯えている。自分の眼を正面から見られない」とあるが、手紙はこうまで言っていない。ただ「ともかく彼は、そのあとからずいぶんと変わってしまいました。あの子は、あなたのお名前を出すのを怖れていたのですもの」とあるだけだ。また著者はズゼッテが「自分の『欲求にも』厳しい『制限を加え』る姿勢を貫きたい」と書いているが、「厳しい」という単語はオリジナルには存在しない。21頁には「そのズゼッテが、最重要のものを表現する言葉がどうあがいても見つからない苦しみへのたうつのである」とあるが、「のたうつ」とまでは言えないであろう。

第一書簡の注釈についてだが、(1)に付けられている StA, Bd. VII-1, Br. Nr. 36. S. 57-58, bes. S. 57 (Z. 1-21)のうち、„— 58, bes. S. 57“の部分は不要である。この注(1)が付いている本文箇所は手紙の原文のみであるから、ベックによる解説は注(1)に入れる必要はない。注(1)としては StA, Bd. VII-1, Br. Nr. 36. (S. 57, Z. 1-21.)とすべきだ。また注(6)の「…クナウプらが説く、第一書簡は九月末から一〇月初めに段階的に書き進められていったと考えるのが妥当であろう」中の「一〇月初めに」とあるのはおかしい。クナウプは „vielleicht noch Ende September 1798 begonnen und im Oktober fortgesetzt“と述べているからだ。そして注(7)で「バイスナーも説くように…」とあるのはベックの間違いだ。StA, Bd. VII-1の編纂者はベックなのだから。またここで出典が StA, Bd. VII-1, S. 62 (Z. 126)としかかないのも不十分である。ベックはその第126行目に解説を加えているのだから、正確にはその出典箇所に加えて StA, Bd. VII-1, S. 108, Z. 29-35を入れなければならない。そこにベックの解説が載っているからである。

次に第六書簡第二部の日付が三月十四日火曜日とあるが、これは木曜日の誤りである。なぜなら第六書簡第一部の日付が三月十二日火曜日だからである(本書72頁および StA, S. 71, Z. 1)。それと原文には曜日の記入はない(StA, S. 73, Z. 53)。また本書簡の次のような解説は是認しがたい―「いまズゼッテはこれに全身を突き動かされ、画を両掌にたちつくすしかない。『風景画』は、すでにヘルダリーンそのものと化していたのだ。ズゼッテは、所有者がすり抜けたヘルダリーン自身を掌にしていたのであったろう。」

本書簡の訳文についてだが、翻訳漏れがある。それは88頁の「弟はここからピルモン

へ旅立つので」という箇所においてである。そこに原文中の „wegen seiner Gesundheit“ を挿入する必要がある (Z. 160 f.)。つまり訳としては「弟はここから健康のためにピルメントへ旅立つので」が正しい。さらに同頁「どんな犠牲を払いまでも」は原文では „um diesen Preis“ となっている。ここは素直に「この犠牲を払いまでも」でよいではないか。著者自身注 (13) でこの箇所にコメントし „um diesen Preis“ と書いている (300 頁)。さらに 89 頁では「『私はどんな犠牲を払いまでも』と強調が置かれたので」と、原文を捻じ曲げた訳文を解説に使用している。そして 94 頁の解説には「この春の寒さに因る『凍え』を案ずる、みずから『おしゃべりの言葉』と名づける心痛の眼は、ただヘルダリーンのみに向けられている」とあるが、この「おしゃべりの言葉」が出ている箇所を読むとズゼッテはそのような痛々しい気分ではないように思う。

第十三書簡の訳では、まず 208 頁左から 4 行目「あなた、」は原文では „mein Bester,“ なので、「私の最良のお方、」とでも訳すべきだ。それから 209 頁では「気持ちが平靜になって」とあるが、原文は比較級 „ruhiger“ なので「より平静に」としたほうがいい。210 頁「いま、ハンブルクで流行しているファッションにすっかりなじんでおりますので」は前後のコンテキストからしてモードのことではなく、自堕落な生活のことを言っているのだろう。したがって原文 „durch die fatale jetzt in Hamburg mode gewordene Art verwöhnt“ どり「今ハンブルクで流行になっているいやな流儀に甘やかされて」と訳すべきだ。そして 212 頁に「愛を抱く人間の嘘のない感情の前では」とあるが、原文には「嘘のない」に相当する語は見えないので、これは省く。

この書簡の解説を吟味してみたい。ズゼッテがヘルダリーンの「シラー宅訪問を断固として阻止しようとしている」と述べられているが、手紙の文面を見るとズゼッテはむしろ、シラー宅訪問を行わないようヘルダリーンを説得しているように思われる。そして「どれもみな、紛れもないズゼッテの肉声なのだが、自らの『気弱さ』にあえて触れたこのときの音律に肉声のうめきを聞いてしまうのだ…これは裸形の心からほとぼしる一個の人間のうめきだ。これは、巨大な不可能の絶望を眼前に突きつけられての、ズゼッテの全存在から押し出されたうめきである」という著者の主張は誇張としか思えない。原文を読む限り、ズゼッテの言葉はこういう主張よりもかなり理性的だ。

第十四書簡の解説についてだが、ランダウアーが「ヘルダリーンの、私講師など、詩人としての独立のための具体策を伴う帰郷を勧めている」という箇所に注 (2) が付されている (224 頁)。この注に従いドイツ古典叢書版の記述を参照するならば、そこにはランダウアーの人柄や彼がヘルダリーンのよき友人であった旨が記されているのであって、彼が詩人に「具体策を伴う帰郷を勧め」たとは書かれていないのである。それゆえこの注の付け方は不適切ではなからうか。

225 頁には「ズゼッテの内部には、あのイエーナ、ヴァイマル以外の場所なら、フランクフルトからそれほど隔たっていない場所ならば許容できる、ヘルダリーンとの離反地図が描きこまれていた。ズゼッテは、現に、あるいはまもなく、自分からますます離れていくヘルダリーンを、既に予見し始めている」とあるが、このように断定的に述べていいの

だろうか。そして本文中にある三つのダッシュが「ヘルダリーンの離反の不可避を承知した予見のしるしだった」としているが、このダッシュは恋人の離反とそれに苦しむ心の葛藤、いつまでも自分のものでいてくれという願いの表現と取ることもできるではないか。ズゼッテいわく「それ以上遠くには、あなたは決して私からお離れにはなりませんね？
—— —— —— 絶対にそうですわね？ —— —— ——」

230頁以下の解説には冒頭「二人の掟の日」とあるが、「掟」というのは大げさだと思うので、「取り決めの日」という程度でよい。また「その予視が、言葉となってもたらされてきたのが本書簡であり、『内部』（うち）から『内部』への変化だった」という文章は言葉遊戯のような感じがする。そしてズゼッテについて「…一女性が、ヘルダリーンの言葉をすべて誤りなく読み取り、その耀きを浴び、顔を一段と紅潮させながら、その放射する光を理解していたのであった」と述べられているが、本書にはこれに限らず単なる想像・連想上の言辞が多い。ディオオーティマ書簡の学術的解説としては物足りない気がする。

第十五書簡結末部について次のような解説が見られる—「ヘルダリーンの『内部世界』[原文では単に „in mir“, 著者の訳文でもただ「内部」となっている—荻野]で『永劫』であり、それ故彼女が『とどまる時間に等しい時間』、彼も『とどまり続ける』とするこれら二文には、前者に感嘆符(!)が、後者には感嘆符を受けて二つのダッシュが付され、またもズゼッテの内部でのヘルダリーンの、つまり不在者の『不在が現前』されている。不可視であるはずのヘルダリーンの可視となり続けていく事態、対者現前の明白な現象事態が、文字となった記号(!, —)付で言われているのだ。特に強調の感嘆符は、その現前確認の語(しるし)＝語(しるし)であり、この現前という事態のあまりの明らかなさに、ズゼッテ自身が圧倒されている証左だ。ヘルダリーンの訪れを、ズゼッテは、自分がヘルダリーンの視る眼と化すことで、もう視始めている。見えないはずの、彼女の『内部世界』に現前するヘルダリーンをありありと視ている。ヘルダリーンのみをありありと視ている!」。しかし本当に著者の言うとおりののだろうか、という疑問がわく。まず感嘆符(!)は就職によって恋人ヘルダリーンのホムブルクからさらに遠くへと立ち去ってしまうのを怖れるあまり、ズゼッテがみずからの信念—あなたは私の心の中からは奪い去れないのです—を恋人に対し強調・確認するものと把握することもできる。さらにダッシュは、みずからのこのような強調・確認のあと、余韻の中で相手ヘルダリーンの「あなたへの私の思いはこれほど強いのですよ、私はあなたを永遠に忘れることはありません」と暗に伝える符号とみなすこともできる。著者のように一概に断定的に言い切ることはできない。

第十七書簡の訳文だが、冒頭の「あなた!」はいただけない。その原語は „mein Theurer“なので「私の大切なお方」とでもなろうか。それから244頁最終行の頭に欠落がある。そこに原文に従って「わたしはそう思います。」と挿入しなければならない。245頁に「あなたにお逢いできないことに…」とあるが、正しくは「あなたにもはやお逢いできないことに…」である。そして246頁には「心配や不安など持たないで」とあるが、原文は単に „ohne Ängstlichkeit“であるから、ここはさっぱりと「心配せずに」とする。また同頁には

「数本の樹」とあるが、これは原文では „eigne Bäume“ なので「自分自身の樹」と直す。さらに「私の小さな夢」は、原文 „mein Wunsch“ どおり「私の望み」としていい。その後の「予見」はこの原文 „wie Du immer voraus sagtest“ にしたがって「予言」と修正する必要がある。247頁「いつも私が…ご想像ください」となっているが、原文 „so stelle Dir nur immer vor“ にふさわしく „nur“ の訳を入れて「どうぞいつも私が…ご想像ください」とする。さらに左から3行目「次回」は原語の „künftig“ にふさわしく「今後」とする。

著者は解説において『私が原因であなたに害が及ぶような事態が生じることだけは、絶対にあってはならないのです』との彼女の言は、他の「何人」も引き受けようもないヘルダリーンを、いますすんで引き受けていく自己宣言と言えよう」と述べている。しかしこの文章を読む限り、これがヘルダリーンの引き受けを宣言するものと取ることは不可能である。むしろこれはヘルダリーンの将来に対するズゼットの気遣いと捉える方が素直だろう。

さらに著者は „wie werde ich die starken Dir entgegen wallenden Gefühle, wieder in den Busen verschließen und bewahren?“ という文を「どうしたら私は、あなたに向かって、このように強く燃えたぎっている感情を、再び胸底に封じ込め隠し抜いていったらよいのでしょうか、どのようにして?—」と訳している。„wie“ という語が二度「どうしたら」・「どのようにして」と繰り返し訳されているが、思い入れが過ぎるのではないだろうか。また „bewahren“ を「隠し抜く」と訳しているが、これはむしろ「保持する」とすべきだろう。また252頁最終行の「あらかじめ」は原文に相当する語がないので、削除する。253頁4行目「それぞれの痛みのなかでも」は原文では „in unsern Schmerz“ なので「私たちの痛みのなかでも」とする。さらに5行目以下「この痛みのなかでこそ」の原文は単に „darinn“ なので「こそ」は削除した方がいい。6行目の「全心身が」は対応する語が原文にはないし、またそれがなくても支障ないので、削除したい。

253頁の解説「ズゼットの言葉が、七日付に較べ、あまりにむきだしに裸になってしまっている」というのは理解に苦しむ。「言葉」ではなく「心中」の誤りか。また「これが、ヘルダリーンという永劫の出発者の保証人を引き受けた者が、代償として永劫に感受しなければならない掟、その掟を遵守する者の叫びなのだ」(254頁)という部分も解しかねる。この書簡の文面を読む限り、彼女が恋人の「保証人を引き受けた」とは考えられないからである。木曜日朝の書簡では恋人が来た場合の大いなる喜びと別れた後の苦しみの共有とが話題になっているのだ。著者のこの解説には曲解と誇張があると思えない。さらに「愛が『痛み』となり、『痛み』そのものがズゼットと化している」とある。確かに愛は痛みでもあろうが、痛み自体がズゼットとなっているとは言えない。そして「もう、これ以上の『痛み』の『喜び』には耐えられはしない『喜び』の逢瀬」という解説にも、素直に賛同することはできない。これは著者の創作的言葉遊びのように読めるからである。

また書簡中にある「ダッシュに並び、文中の空白もこの『痛み』となっているので、明瞭に記された『強められている』と『祝福が』との、それぞれ直前に置かれた…空白は、これらの言葉の一部と化す。愛の言葉の発語と化しているのだ」という説明には、かなり

無理がある。例えば本書簡最後の三つのダッシュについては、ベックが手紙の終わりを示す印章としている。そのほかのダッシュは余韻や休止、あるいは思慮を表すものと考えられよう。また空白については小磯自身「テキスト自体の判読がきわめて困難なので、これ以上の読解は望めまい。結局、拙訳でもこれら二箇所については、ベックに則り、空白のままとした」とも述べている。つまり空白の部分には元来ズゼッテが何らかの言葉を記していたのだが、読み取りが不可能なため空白としたわけだ。したがって著者みずからが空白に関して互いに食い違う二様の説明をしていることになる。

以上ズゼッテ書簡の翻訳・解説・注につき、疑問に思うところを述べてみた。結論としては、翻訳には誤りや漏れ、恣意的な箇所が存在し、解説は時々極端に思弁的となり、言葉遊戯や誇張がある。注は客観的に見て公正でない場合があり、スペルや数字の間違いも散見される。それゆえ本書の内容は今ひとつ正確さ、公正さを欠くように思われる。

しかしだからといって本書の価値が減るわけではない。十八世紀末における市民階級の女性の愛と自由に対する情熱を、ディオティマ書簡ほどよく表すものは他にないのでなかろうか。私見によればズゼッテの形姿をヘルダグリーンの詩作に探る研究は比較的多いが、重要な意味を有するその書簡自体についての研究は少ないであろう。パウル・ラーベのヘルダグリーン書簡に関する研究においても、ズゼッテ書簡についての言及は乏しいように思う。また私の知る限り本邦においては谷友幸と浅井真男の翻訳があるが、そこでは全十七書簡について本書ほど詳細な解説は行われていないし、諸テキストの比較対照・検討作業はさほどなかった。小磯の書はその意味でも意義ある力作といえる。

(岩波書店 2004年)